



医療法人真生会 真生会富山病院
整形外科 部長

太田 悟 先生

臨床して、手術をして、 患者さんの信頼に応えたい

整形外科のアプローチから、
リウマチを診療するようになって

——なぜ医師になろうと思ったのですか。

太田先生（以下敬称略） 中学の頃、高校受験のタイミングで漠然と。野口英世とかシユバイツァーとか、伝記を読むのが好きで、憧れていたのだと思います。

——リウマチ医を目指したきっかけを教えてください。

太田 自分には外科系だというイメージを持っていたので、国家試験を終えて金沢大学の整形外科に入局しました。関連病院を3カ所周り、大病院に戻ったところで、当時の教授から専門はリウマ

チでどうかと勧められました。

その後、能登の病院に赴任し、骨折などの外傷を中心に診ていましたが、ニーズがあって整形外科の人工関節の手術にも取り組むようになりました。当初、リウマチの患者さんは、限られていました。

私は肩を専門にしていくなかで、リウマチ性多発筋痛症で両肩が上がるという患者さんも多く診察し、その後関節リウマチに移行してしまう症例も多く経験しました。抗リウマチ薬や生物学的製剤の登場で患者さんが良くなっていくのを目の当たりにし、早期に診断し治療することの重要性を実感しました。現在の真生会富山病院に赴任後もリウマチ

の患者さんがどんどん私の方に回ってくるようになり、今に至ります。

——リウマチへの取り組みはいかがでしたか。

太田 日本整形外科学会のリウマチ専門医を取得後も多くの患者さんを診察し、臨床でどんないい成績を出そうと思いました。臨床して手術をして、自分の専門分野である肩関節と関節リウマチをつなげて、治療をもっと深めていけば、さらに早期発見、最適な生物学的製剤の選択などにつながると思っています。

医師になった当時はあまり薬もなく、本で調べたり、リウマチの先生の処方を見たりと、手探りの状態でした。

今になってみると白紙に近い状態だったと思います。抗リウマチ薬や生物学的製剤が出てからは勉強する機会も増えました。あの頃に比べると、相当違いますね。

臨床研究に貢献していきたい

——リウマチ医を続けていくモチベーション



リウマチ専門医になった頃

——モチベーションは何か。

太田 新しい治療薬が増えてくると、選択肢も増えて、治療のクオリティを上げられます。やはり、いいものを提供したいと思います。患者さんが次回の来院で良くなったと笑顔で言ってもらえることがリウマチ医を続けていくモチベーションになっています。2017年に、関節リウマチ専門外来も設置し、さらに患者さんの増加が見込まれます。

また投薬だけではなく、手術のできる整形外科医としてリウマチを診療していきたいと思っています。これは自分の強みだと思っています。

エコーだけでなく滑膜病理所見が早期診断、治療の評価、高齢発症した際のデータの蓄積として役に立つことを研究しています。そういった症例を積極的に発表し、臨床研究にも貢献していきたいと思っています。まだまだやるべきことがあると思っています。

——患者さんにとっての願いは何か。

太田 患者さんと医師とは、信頼関係が一番大切です。

信頼関係ができれば、私たちも「もし自分の家族の治療だったらどうする?」というように、親身になって診療にあたることができると思います。患者さんの信頼にお応えしたいですからね!

(2019年11月6日インタビュー実施)